

生活苦で失意の中退

ここにいるよ

沖縄 子どもの貧困

第1部 群像

⑪

「もう、無理だ」。離島出身のケンジ(21)はおととしの7月、作業療法士を目指して通っていた本島の専門学校を辞めた。奨学金で学費と生活費をやりくりしていたが、立ち行かなくなつた。

医療系の専門学校の学費は、授業料と諸経費を含め、3年間で約430万円。県内の私大4年間の学費よりも高かつた。母子家庭で、臨時職員の母親の給与では進学費用は工面できなかった。日本学生支援機構から奨学金を借りて学費、生活費のすべてを賄うことになつた。

無利子の第1種だけでは足りず、有利子の第2種も合わせて月16万円を借りた。そのうちの10万円は半年ごとに支払う授業

料のために取っておかなければならない。

残りの6万円がケンジの生活費。1人暮らしのアパートの家賃3万4千円を引くと、2万6千円しか残らない。

光熱費を節約するため、引越したときにガスを引かず、10月まで水風呂で通した。半年近く洗濯機も買えず、服はすべて手洗ひした。おしゃれもしたかつたが、常にジャージ姿だつた。ボウリング場に遊びに行つても、「俺はいいよ」と後ろに座つて、友達のプレーをただ眺めた。

国家試験に向けた学校の勉強はハードで、テストも多く、学生は皆、授業の後も、夜遅くまで自習した。アルバイトをする時間はなかつた。

生活費が足りなくなり、取っておいた10万円に手を付けるようになり、授業料の支払いが滞つた。別途必要な実習費20万円の支払いを前に、中途退学を決めた。

「これから仕事に就けるのか。」



奨学金の返済が始まつたケンジ。「将来が不安」と語る

借金はどつしよう。島の人にも合わせる顔がない。死にたい」学校を辞めた挫折感と、借金返済の不安で、精神的に追い詰められ、一時、引きこもり状態になつた。食事ができなくなり、半年で体重が15kg減つた。

ケンジは昨年5月から、知人の紹介で、金融機関の子会社で臨時社員として働き始めた。仕事は夜勤があり不規則できつい。月給は手取り14、15万円で20代にしては悪くない。だが、勤続20年ほどの40代の正社員の給与も自分とほとんど変わらなかつた。子どものいる社員の生活は

かなりきつそうだ。長くは続けられないかもしれないと思う。11月には奨学金の返済が始まつた。利子を入れた返済総額は約354万円。月約1万5千円の支払いが40歳まで続く予定だ。「自分は資格も、何も無い。将来、家庭を持つことができるのかな」。ケンジは自分の未来予想図を描けないでいる。

将来家庭を持てるのかな

(文中仮名)
「子どもの貧困」取材班・高崎園子 || 火々木曜日掲載

記事に関するご意見、情報をお寄せください。

ファクス：098(860)3483 メール：kodomo-hinkon@okinawatimes.co.jp